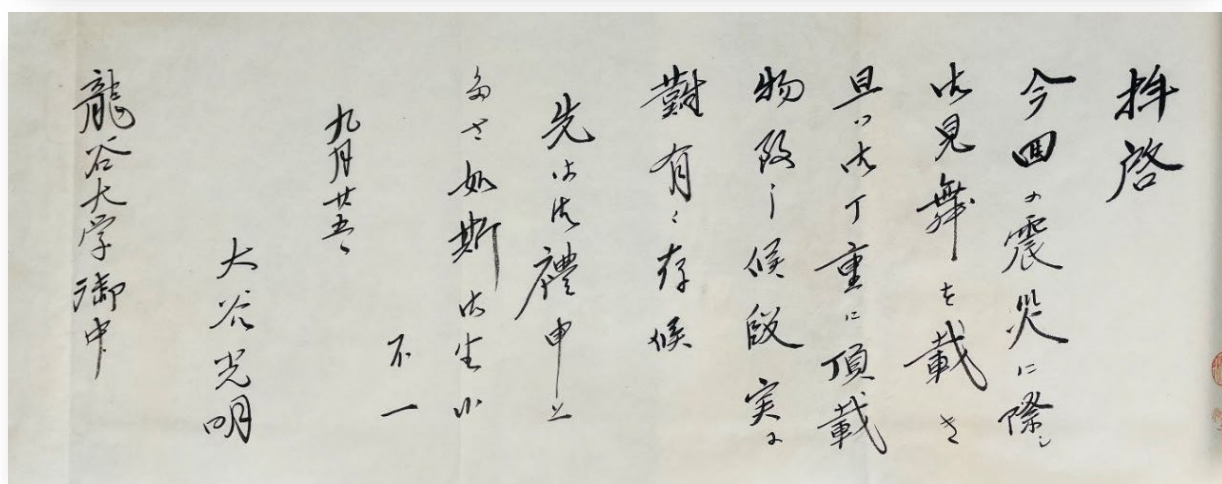
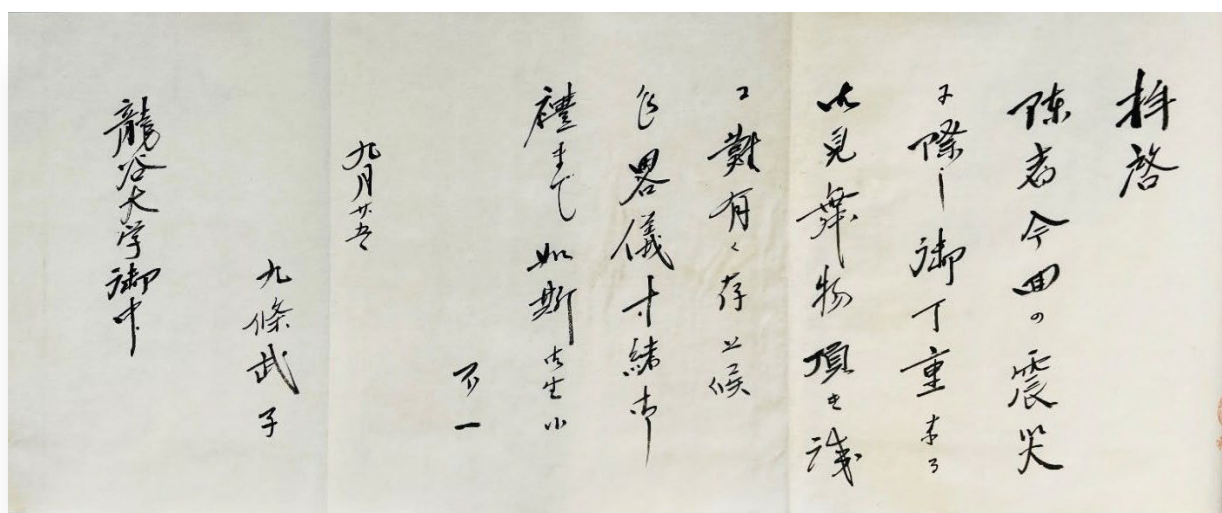




Ryukoku University



龍谷大学史報

Archives and History

目次

龍谷大学農学部創設のころ	末原 達郎	2
情報化余談		
理工学部設置準備からデジタルアーカイブへ	岡田 至弘	6
『学林諸記』三・四 天保九年（一八三八）七月～八月		I～VI
表紙解説・資料室だより		16



龍谷大学農学部創設のころ

龍谷大学名誉教授 ^{すえはら}末原 ^{たつろう}達郎

はじめに

龍谷大学に農系の学部を創ろうと思っているのだが、相談にのって欲しいと連絡を受けたのは、2014年のことでした。わたしは当時、京都大学大学院の農学研究科の教授でした。専門分野は、農学原論といいます。農学の発展の歴史を抑えながら、科学としての農学がどのように進むべきかを考える専門分野でした。龍谷大学とは、すでにご縁がありました。京都大学に赴任する前に、龍谷大学の国際文化学部（現：国際学部）の創設時の教員として、龍谷大学に四年間勤めていたからです。

龍谷大学の国際文化学部は、瀬田キャンパスにあり、外国籍の教員が半数を占めている自由な学部でした。わたしは、国際文化学部の雰囲気と教員の先生方が、とても気に入っていました。

京都大学の大学院では、主に研究者の養成に励んでいましたが、龍谷大学の執行部から、上記のような相談がありました。わたし自身は、全国の大学の農学部のあり方に少なからぬ疑問を持っていましたので、思い切ってご提案を受けることにしました。

1. 農学部創設の理念

新しい学部を創設するとなると、その学部を創設することの理念が必要となってきます。わたしにご相談がある前に、龍谷大学の執行部でどのような議論があったのかは、よく知りません。新しい理系の学部を創設したいこと、それも瀬田キャンパスの地で農学系の学部にしたいと考えているとの、説明を受けました。国際文化学部の深草キャンパスへの移転も、すでに決まっていたようでした。

わたしは、まずどのような学部を創ろうとしているのか、その理念づくりに取り組みました。

それまで執行部やその意を受けた部署や大学創設のコンサルタント会社で議論されたこととして伝えられたのは、どのような学部であれば学生が集まり、また経営的にも問題がないか、龍谷大学の全体の中ではどのような分野が欠けており、その分野の増設により総合大学としてどのような大学になり得るのかという視点からの議論だったようです。

わたしは、思い切って「農学部」を創るのがいいと、提案させていただきました。生命科学系の学部ではなくて、「農」を冠した学部にすべきだと。

実は、2000年代に入って、全国の国公立の大学の農学部は、こぞって農という名前を外し、「生命科学部」や「生物資源学部」に名前を変えていたからです。その理由は、二つあります。一つは、「農」という名前が時代遅れでかっこうが悪いのではないかという思い込み、もう一つは、農学が細分化しすぎて、農学の先生がその中の一部分である生命科学やバイオ・テクノロジーの専門家に

なり、「農学」から「バイオ」科学へ変換することによって国の予算を容易に獲得できると考えた時代であったことです。歴史のある名門大学では「農」の看板を降ろしませんでしたでしたが、地方の国公立大学では、「生物資源学部」や「生命科学部」が急増しました。

わたしは、そのことを疑問に思っていました。「農」ではかっこうが悪いと思われていたのは、農学部を出ると農家になると考えられていたからです。わたしは、そうではありませんでした。また、農を位置づけるのに、農家だけを考えてはいけません。国民全体、あるいは人類全体の食のことを考えなければならない。食を支えるのが、「農」である。したがって、農学部というのは、人類全体の食に直接かかわっている学問だという点です。「農学部」を「農家」のための学問から、人々の「食」を支える「農」の学部にする必要があると、考えました。

第二に、生命の問題があります。生命の本質を、食と農を通じて考える学部を創ってはどうかと。龍谷大学は仏教系の大学です。その中で考えられるのは、生命の営みであり、生の問題であり死の問題です。しかも、ただ人類だけではなく、すべての生物にとっての生と死の問題を考えてみるところに、龍谷大学の特色があると教わりました。

それならば最も身近な食の問題から、人間だけでなく動物や植物の生や死を、食というものを通して見直すことができるのではないかと。それは、まことに仏教系の大学にふさわしく、龍谷大学にしかできないことではないかと。

農学の面白さは、生物系のテクニックを駆使する学問の面白さだけではなく、食を通じて現代人のすべてに、食と命についての問いかけをする学問の面白さではないか。それを根底にバイオ・テクノロジーそのものをよく考え、人間の幸福に資する学問へとすべきではないかと。これは、日本だけではなく世界全体にも貢献できる学問分野ではないかと考えました。

しかし、各学部からはさまざまな意見が出てきました。「農」学部という名前で、本当に学生が集まるのだろうか、あるいは隣接する学部では、受験生が取られるのではないかという心配もあったようです。わたしは、理工学部と農学部では大きく異なっているし、受験生もすみ分けできるだろうことを、また経済学部や経営学部とは、そもそも受験生の枠組みが異なっているのではないかと、説明いたしました。

また、国公立大学の受験生からは、私立大学の農学部の併願校が少なく、困っていることも知っていました。いい教授陣に集まってもらえれば、国公立の受験生も取り込むことができると考えていました。

そして、この理念を実現するために、4つの学科と、それをうまく組み合わせたシラバスの体系が必要だと考えました。

2. 学科の編成、シラバスの体系、教員の公募

学科の編成を考える時も、食と農を一貫して考えられる学科編成にしたいと考えました。まず、農作物の生産を主として扱う「生物資源科学科」、生命現象の基本を探究する「植物生命科学科」、農産物の流通・卸し・販売を研究する「食料・農業システム学科」、できてきた農産物を調理し、食品と栄養の研究をする「食品栄養学科」の4学科です。

それでは、今度はどうやってこれら4つの学科の融合を図るかが問題になります。

わたしは、他の先駆的に着任した教員と図って、4学科共通の実習や授業を行ってみることにしました。

特に、一回生の初めから、「農学概論」と「食と農の倫理」という学科目を配置し、食と農を通じて農学部で何を学ぶかを考えてもらうことにしました。

次に実習です。農学部のいいところは、現場に出て、土に触れ、人に触れ、畑を耕し、作物の収穫を実感するところにあると、考えていました。そのため「食と農の循環実習Ⅰ・Ⅱ」という科目を設定し、新入生全員の必修科目としました。

畑地に出向いてのフィールド実習は、学生自身にとって農学部生としての実感と自覚を養います。しかし、全国の大学を見渡しても、農作業の実習を一回生全員が行うというのは、ほとんどないに等しかったのです。おそらく、多くの大学では、農学部実習の必要性和有効性を自覚していますが、実際に行うには教員の人手が足りません。そのため、農学科などの特定の学科の学生の

みが参加できるというのが実態です。しかし、龍谷大学農学部では、新入生全員が参加するように構想しました。それでは、なぜこのような実習を課したのか。最大の理由は、4学科の学生が融合できる機会を与えるためでした。大学の学生時代に知り合った友人とは、人生を通じて交友関係が保たれる場合があります。4学科の学生が専門課程に進み、互いの研究内容を知らないものとして乖離してしまう前に、学科の枠組みを超えて、共同で農作業を体験することが、専門課程に進学後も友人関係を作り、あるいは他の学科の内容に興味を持たせる機会になると、考えたからです。先駆的で独自の試みです。しかし、そのために教員側の負担は多くなります。4学科全員の学生に対応するためには、4学科の教員が少なくとも計20人は参加せざるを得ません。1年間であれば、40人の教員の参加が必要となってきます。しかも、自分の専門以外の内容を、専門の先生を手伝いながら学生のケアをする必要があります。この大変な役割を、農学部早々の先生方は、担っていただいたことになります。

この試みは、実際には、かなり有効に働いたようです。卒業生にアンケートをとったところ、一回生・二回生で体験した食と農の循環実習が、大変ユニークで興味がもてたし、この時代に学科を超えた友人ができたと答えてくれた卒業生が、多数いました。結果的に、大成功だったようです。

3. 人文社会科学と自然科学との架橋

龍谷大学は、人文・社会系の学部が多い大学です。農学部は、人文・社会系の学科と理系の学科が融合しているところに、特徴があります。しかし、このことを実感してもらえるのは、並大抵のことではありませんでした。まず、理系の学部にとっては当たり前のことでも、文系の学部にとっては理解しにくいことの一つに、ラボ（実験室、研究室）の運営があります。わたし自身も、もともとは文系の学科の出身だったため、ラボの運営がどれほど大変かに気がついていませんでした。文系の場合は、多少の文房具と本があれば、明日からでも研究室の運営は可能です。しかし、理系の場合のラボは、まさに言葉どおりのラボラトリーで、実験器具も薬品類も、前から始動させておかなければ、突然開始できるものではありません。

このためには、多くの教員が自らのラボを運営できるように、自主的に実験室に詰めてもらい、実験器具や実験材料の運用を行ってもらう必要がありました。最初に赴任していただいた先生方には、こうした自主的な運営を担っていただくことで、新入生が入ってきた時には、スムーズな運営が可能になりました。

逆に、理系の先生方と文系の先生方との間には、論文に関して埋めがたい溝も存在しました。たとえば龍谷大学では、学部ごとに研究紀要が発刊されています。わたし自身も、当然そのような研究発表誌は必要だということで農学部の研究紀要を創ったのですが、理系の先生方の中には、紀要の必要性を感じられていない方も少なくありませんでした。要は、論文を発表するのならば、英語で学会誌に載せることが重要だと考えておられたようです。もちろん、英語の論文を学会誌や、海外のジャーナルに載せることも重要ですが、大学の学部というのは、自分たちの発表手段というものを常に持っておかねばならないし、それが学問の自由やこれまでの発展にいかにか寄与していたかを、わたし自身はよく知っていたからです。この点に関しては、深草や大宮の学舎の先生方との意見は一致していましたが、なかなか農学部の理系の先生方からは、支持されなかったのが残念です。ただ、農学部にも食料農業システム学科のように、人文・社会系の先生方がおられたので、なんとか紀要の存続はできたようです。本当は、英語の論文を発表するとともに、日本語でも論考（エッセイ）を投稿できるようになってもらえる理系の先生が増えることを望んでやみません。

実際の問題に照らして辿ってみれば、このように理系と文系の溝は、存在しないわけではありません。しかし、わたしは当初から、理系と文系という枠組みを取り壊すところから農学部の創立を考えていました。カリキュラムもそうですが、入試の段階でも理系からも文系からも受験できるようにしたいと考えました。また、卒業後は、理系の就職口だけでなく、商社や運輸、流通、卸し、販売といったいわゆる文系の就職口も考えていたからです。

4. 出口の問題と今後

新学部創設にあたって、経済界の人々にも積極的に会いに行き、話をする機会を得ていました。その場合、農学部であっても、農業だけでなく、運輸、流通、小売りの市場にぜひ参画してほしいという経済界の人々が少なくありませんでした。特に、生産から流通、販売にいたるフードシステムを理解している学生が欲しいとも言われました。わたしは、当初学部の受験生の父兄に話をする場合、受験科目やカリキュラム、教員の質や実習に関しては、自信をもって説明できていましたが、父兄から「就職はどうなりますか。」と問われた時には、自信をもって答えることができませんでした。まだ、一人の卒業生も出していなかったからです。そして「大丈夫ですよ。かならず社会が必要としますから。」と述べていました。また、「農学部を出たことは、かならずしも農家となることではなくて、食と農に関係するさまざまな職業に就くことだ。」と答えていました。ところが、経済界の人々と話してみると、むしろ世間が思っている以上に、実業界は食と農に関する人材を求めていることが分かりました。わたしは、意を強くして四年間の学生指導にあたり、学生たちの卒業を迎えることになりました。実際にはわたしが考えている以上に、就職率は良好でした。卒業年度の1月の段階では、文科系の各学部よりも上まわって、96%を超えていたくらいです。学生の就職先に関するアンケートでも、満足度の高い就職口であったようです。また、懸案であった管理栄養士の国家試験も、食品栄養学科の先生方の献身的な努力の結果、予想を上回る合格率で、他校に対しても胸を張れることができました。

新しい学部の宿命である出口の問題は、結果的にはスムーズに突破できたことになります。就職に関しては、これからますます本学部の卒業生のような人材は、必要とされる時代に入ってきていると思われます。これからは、単なる就職先としてよりも、より社会や世界に貢献できる人材に育ててもらいたいと思っています。

今振り返ってみると、龍谷大学農学部を創立することができたのは、時期と経緯、さらに場所と理念が一体となって、運命に導かれたように実現できたと思っています。現在話題になっているような「食料問題」、「自然環境問題」、「農業と食料の結びつき」、「生命科学と命の問題」などを先取りして、学部の旗を掲げることができたのは、まことに幸運だったと思います。これには、当時の大学執行部の皆様、大学事務局の皆様、また農学部以外の他学部の学部長や先生方のご理解とサポートがあって、はじめて実現できたと思います。心から感謝いたします。

しかし、いったん完成した農学部も、これからますます解決しなければならない諸問題が、「食と農」をめぐる出てきます。日本国内だけでなく、地球の人々全体にも貢献できるような学部に成長していただくとともに、新たな学部の改変にも勇気をもって進んでいただくことを願ってやみません。



情報化余談

理工学部設置準備から

デジタルアーカイブへ

おかだ よしひろ
龍谷大学名誉教授 岡田 至弘

1. 深草・瀬田キャンパスでの理工学部設置準備 理工学研究所 1988 年

理工学部設置準備にむけて 1988 年 5 月に理工学研究所講師として着任した。

この事業は、設置委員会によって、教務・研究・施設に大別され着々と進められていたが、龍谷大学での情報化の嚆矢事例として記憶している。着任すぐの業務は、設置委員会によって分担準備のすすむ共通部分“情報システム”の基盤設計と導入・運用となった。

導入・運用準備だけでも通常 1 年以上の作業期間が必要とされるが、学部開設まで 11 ヶ月に迫った中での慌ただしい日々であったことを思い出す。通常、理工系大学におけるの共通情報システムとして、教育・研究用計算機を導入し、その運用のための計算機センターを設置する。また、他大学との共同運用ネットワーク（のち現在の E-mail につながる）の選択・運用が必要となる。

これらの共通計算機・共同運用ネットワークを瀬田キャンパスに導入する作業のため、1988 年 5 月深草キャンパス 5 号館に臨時実験室を設置していただき、少数の計算機相互を LAN (Local Area Network) 接続したシステムを導入した。理工学部の中核建屋となる瀬田キャンパス 1 号館の建築と並行しての作業となった。

2. 計算機支援の教育・実験

理工学部共通の教育系情報システムは、当時一般的であった、汎用計算機によるコンピューター言語教育を採用せず、学生 1 人 1 台占有の計算機による教育方法を採用した。

筆者は、龍谷大学着任直前に、米国 MIT (マサチューセッツ工科大学)、CMU (カーネギーメロン大学) を先進事例として視察し、日本への適用可能性を判断した。

この視察から、一定の計算機パワーと高精細ディスプレイをもつ計算機（当時は、エンジニアリング・ワークステーションと呼ばれていた）を相互接続した大規模なシステムの導入を目論んでいた。設置委員会での十分な協議を経てのハードウェア準備と並行して、肝心の教育内容の準備を、利用するエンジニアリング・ワークステーションの運用・利用方法の試行を進めた。コンピューター言語教育に特化したシステムでなく、語学教育を含む共通教育への適用と、理工学専門領域を横断する教育にも展開できることを前提に計画していった。

国内での計算機支援教育の現状を判断するため、ハードウェア（国内設計・生産のエンジニアリング・ワークステーション）、カリキュラム（専門教育への計算機支援）、コンテンツ（電子教材作成と CD-ROM 適用）に分けて、1988 年 6 月に関東地方への視察を行った。

理工学研究所からは、理工学部長予定者の坂井利之教授と、筆者、設置委員からは、経済学部の三枝利文教授、設立準備室からは、上野浄丸瀬田教学課長の 4 名が参加した。

国産エンジニアリング・ワークステーションのメーカーとして、ソニー（株）スーパーマイクロ事業部を訪問し、発売前の製品の説明を受け、社内での応用事例を見学し、大学教育への展開が可能であることが示されたと考えた。

国内の大学への視察は、設置委員の前任校の事例・国立大学計算機教育センターの詳細な資料から十分な情報を得ており実施を見送った。ただ、企業内での技術者への実践的・専門教育については、公開情報が少なく、その代表事例として川崎市内の日本電気工業技術短期大学校を訪問し、専門教育への実際のカリキュラムと実験・講義の紹介を受けた。日本国内に展開する事業所相互を接続する衛星通信網を駆使しての運用事例を拝見した。

コンテンツ開発の実際は、この視察名称（CAI：計算機支援 ソフト開発に伴う実地視察）が示す、中核課題でもあり、当時の国内での電子教材制作会社のトップランナーであるハイテックラボ・ジャパン(株)を訪問し、現在の電子教材作成方法と異なることが少ない方法での CD ベースの教材展開を視察した。

この視察から伺えることは、ハードウェア・コンテンツとも、標準的な方法（インタフェース・規格・電子教材の形式）が乏しく、かつ相互接続（ネットワーク）の実現に、大きな予算化が必要であることであった。視察後、これらの課題解決に向けての作業に追われたことを思い出す。

＊1989 年 4 月開学時 1 回生計算機教育では、教材はオンライン教材のみとし（CD 作成時間足らず）、多くの 1 回生担当教員の協力を得て、電子教材化を終えた。

理工学部設置段階の慌ただししい準備をへて、理工学部 1 期生も 2 回生を終了し、3 回生からの専門教育を迎える段階で、理工学部計算機支援教育も一定の評価が可能な段階になった。当時の京都新聞（1991 年 3 月 10 日）に、“知のキャンパス”を主題とする稿を起こした。

以下 引用抜粋

リテラシーという言葉があります。直訳すれば「読み書きの能力」とでもいうのでしょうか。情報をいかに活用していくか—コンピューター・リテラシーの教育が始まっています。従来のコンピューター教育は、「コンピューターの操作・プログラミングに主眼が置かれていました。しかし、最近の情報洪水の中で、自らが必要とする情報の抽出や、情報の積極的活用などの行為は、極めて複雑かつ困難になっています。単にコンピューター操作ができるだけでなく、情報の入手・検索・整理の道具としてコンピューターを用いて「情報の積極的活用」が図られるならば、情報洪水の海をうまく泳ぎ切る手段になるのではないのでしょうか。

従来のキャンパスでは、特定の学科、学部、職種ごとに、教育や図書、メールなどでコンピューターを利用してきました。しかし、情報環境という普遍的な場を設定するとすれば、教育面では全学生対象のコンピューター・リテラシー教育を実践していくことになります。また、研究・専門教育面では、教職員対象のキャンパス内 OA（オフィスオートメーション）LA（ラボラトリーオートメーション）を構築していくことになります。ここにおいて情報活用の中核としてのキャンパス、つまり「知のキャンパス」が位置づけられることになります。統合的な情報環境は、キャンパス内でなく、高度情報化社会が進めている情報化の成果を融合し、情報資源のアクセス・活用の許容や、また任意の地点からの利用をも可能にすることを意味しています。（中略）

龍谷大学理工学部では、統合的な情報環境「RINS」が構築され、コンピューター・リテラシー教育の実践が進められています。RINS は、学生・教職員 1 人につき 1 台の割合で、大型コンピューターなみの処理能力を持つコンピューターが割り当てられます。グラフィカルな画面上で、紙芝居のように必要なテキストやマニュアルなどを見ることができます。同時に他の情報資源への任意のアクセス（内外の電子メールやデータベース利用、または通常のプログラミングなど）が誰でも可能となっています。「知のキャンパス」に向けた努力は、現在多くのキャンパスでなされています。

その後、龍谷大学では、瀬田キャンパス全体の情報化（理工・社会学部、図書館、庶務部）に向

かい、90年代半ばには、3キャンパスを統合するキャンパスネットワークに向けて、まずは、教育用ネットワークの統合化を終えた。2000年には、教育・研究・図書館・業務系を包括する総合ネットワークへと発展していったことは、多くの教職員の理解があって初めて実現できたことを今さらながら痛感している。

3. 情報ベースシステムによるデジタルアーカイブ 1991年～

科学技術振興大規模連携研究のもとで、“自己組織型情報ベースシステムの構築に関する研究”（科学技術庁）を、1991年から94年まで進めた。龍谷大学坂井利之学部長を研究代表に、情報の資源化方式・自己組織型情報ベースシステム基盤技術・高度利用に分担し産官学の共同研究体制となった。参加大学は、東京大・筑波大・神戸大・北海道大、そして龍谷大、研究機関として、日本科学技術情報センター・通産省・理研ほか、多くの民間企業研究所が参加した研究プロジェクトであった。当方は、この中での1テーマ“マルチメディア自己組織化データシステム”部門責任：小淵洋一教授の研究を担い、94年度のマルチメディアデータシステムの実装事例として、大谷探検隊将来資料データベースを構築していった。この時点では、大宮図書館での探検隊資料のデジタル化（CDデータ）を借用してのシステム化が極めて迅速に進められた。このプロジェクトと並行して進められていた、池田重良図書館長の下での“古典籍調査専門委員会”による調査報告のデジタルアーカイブ化に結実していくことになる。

＊この当時の研究成果 大谷探検隊将来資料のデジタル化は、2001年開設の、古典籍デジタルアーカイブ研究センター（コンテンツ研究：入澤崇教授代表、科学分析：江南和幸教授代表）へと繋がり、国際共同研究IDP（敦煌研究プロジェクト）への参画（代表：三谷真澄教授）に発展している。

＊1990年代の古典籍調査専門員会では、自然科学系の古典籍に新たな調査が進められ、舎密開宗や、和算書、そして本草書の再評価が自然科学系研究者からなされた。本草の研究は、2009年11月、杏雨書屋において上山大峻名誉教授による“本草集注序録”の展覧・研究発表が行われた。2022年11月、その後の“本草集注序録”の研究進捗とIDPおよび新たなデジタルアーカイブへの展開として発表された。

4. マルチメディア・デジタルアーカイブ高度利用へ 1994年～

1991年からの情報の資源化方式・自己組織型情報ベースシステム基盤技術・高度利用の研究は、文部科学省の研究高度化プロジェクト：ハイテクリサーチセンター（HRC）およびアカデミックフロンティアセンター（AFC）に引き継がれ、当初の実験的パイロットシステムから、実際的な応用プロジェクトに発展していく。

1999年3月には、西本願寺白書院内の杉戸絵のデジタル修復（静止画）をNHK特集「絢爛たる桃山の美」と題して、成果公開がなされ、その後、西本願寺の修復事業への高度利用として、御影堂大修復の中での内陣・障壁画のVR復元を完成させ、その映像表現をNHK特集でも広く公開していくこととなる。

2000年からは、大谷探検隊100周年記念事業の1つとして、西域、トルファン郊外のベゼクリク石窟寺院の復元が文学部百濟康義教授を中心とした復元プロジェクトが開始された。2000年当時、復元対象のベゼクリク第20号窟の壁画資料は、大宮図書館所蔵の大型図版しかなく、同図版の撮影と、高精細デジタルデータ化から開始した。この作業のため、当時先端の建物図面専用の大判スキャナーを、市内設計事務所で借用した。現在は、大判デジタルカメラや、大判スキャナー利用は、普通に利活用可能であるが、当時の図面専用スキャナーでは、形状精度十分、色彩精度不十分で、色彩復元のために得られた、西本願寺デジタル修復の手法が極めて有効となった。

＊この復元は、陶板画により永続保存可能な形態とした。高精細デジタルデータは、陶板への釉薬による色彩復元と欠落部分の特定のため文学・理工学部の多くのゼミ生の協力により完成した。

＊2006 年 1 月には、大宮図書館改修を記念して、陶板 2 面（ディーパンカラ佛授記、舟上の佛と隊商主）が、図書館ロビーに設置された。

2005 年 2 月には、同ベゼクリク石窟寺院の復元を、上記大型図版のデータだけでなく、ドイツ、インド、ロシア、東京国立博物館に収蔵されている壁画断片の撮影と、国内外の研究者所蔵の写真・図版を、NHK 新シルクロード取材班の尽力により得られた。特に現在の中国・ベゼクリク石窟寺院の撮影では、モデル設計段階の高精細・色彩映像カメラを現地に持ち込み、極めて精細な色彩データを得ることができた。

この復元では、静止画による復元だけでなく、CG 復元と映像生成までを、Hi-vision（現在の HD・2K 放送）で放映された。（新シルクロード 第 2 集 トルファン 灼熱の大画廊）

＊陶板画復元同様、入澤崇教授、文学部ゼミ生、多くの AFC 研究員そして、NHK および協力企業の奮迅努力により、放映までの限られた期間内での事業となった。

＊当時の復元成果は、4K 映像にアップデートされ、龍谷ミュージアム 4K シアターに活用されている。同ミュージアムのベゼクリク回廊復元（実物大・色彩復元）では、間接照明による、より彩色・表面凹凸表現をめざした石窟復元となっている。

5. コンテンツ中心の高度利用へ 2006 年～

古典籍・文化財デジタルアーカイブ研究センター（DARC）の研究プロジェクトの成果として、“黒澤明デジタルアーカイブ”がある。映画・映像主体のアーカイブと異なり、最終成果としての映像作品を従とし、主役は、作成する過程そのものとした。前年までの、石窟寺院復元同様、入手可能な資料すべてのデジタルアーカイブ化と、映画の主題となる、台本・シナリオ（途中改訂すべて）を中心とした情報ベースを念頭に置いた。さらに、創作ノート・メモ、絵コンテ、およびスチール写真を加え、監督個人の完全に近いデジタルアーカイブとした。コンテンツ提供側の黒澤プロダクションの全面協力のもと、映像・データ解析専用コンピューターメーカー日本 SGI（SGI 社：スーパーコンピューター・高性能 CG メーカー、日本では、当時、コンピューティング＋コンテンツ事業の積極展開）と、大学との共同研究を進めた。

2014 年 8 月末、瀬田キャンパス樹心館壁面をキャンバスとするプロジェクションマッピングをおこなった。一般公開による、映像作品公開であり、学部生倉知・大塚さんを中心に“龍谷大学図書館 1885 年から現在まで”をテーマに、図書館の変遷の歴史と大谷探検隊の紹介を表現した。

2015 年 3 月には、プロジェクションマッピングの成果をもとに、東京築地本願寺の正面を投影スクリーンとする高度応用を試みた。築地本願寺の正面とは、粗面の壁面と、奥行き 20m 以上ある、凹凸形状のスクリーンへの投影となり、多くの高輝度プロジェクターの多方向投影となる実験的映像表現となった。主題は、現在の築地本願寺と大谷探検隊とし、映像と連携する楽音（パイプオルガン創作）との連動により、大きな反響をよんだものとなった。プロジェクターメーカー、築地本願寺、映像音響機器のシステム設計会社、龍谷大学東京オフィスの協力により成し得たものと考えている。

HRC,AFC,DARC,龍谷ミュージアム,理工学部・先端理工学部,情報メディアセンターでの“情報化”の研究・業務に参画できたこと、多くの学内関係者のおかげと感謝するものである。

留役所『学林諸記』三・四 天保九年七月〜八月

印持	『史報』十二号頭注参照。	同日	越中	印持 [※]	龍曉	『史報』十二号頭注参照。	善好	撰津国西川原村西光寺。のち藤満。
惠麟	『史報』十二号頭注参照。	一	越後	惠麟 [※]	竟岸	のち下野国安養寺。		
司教	『史報』一号補注③参照。	一	越後	惠麟	左司馬	『史報』二・十号頭注参照。		
惠門	『史報』十二号頭注参照。	一	越中	印持	僧朗	『史報』十二号頭注参照。		
隨惠	『史報』十二号頭注参照。	一	越中	印持				
助教	『史報』十号補注③参照。	一	越中	仁識 [※]	義門	『史報』十二号頭注参照。		
仁識	『史報』十二号頭注参照。	一	豊前	隨惠 [※]				
得業	『史報』十号補注③参照。	一	豊後	古明 [※]				
古明	『史報』十二号頭注参照。	一	豊前	宣明 [※]				
宣明	『史報』十二号頭注参照。	一	撰州	了空 [※]				
了空	『史報』十二号頭注参照。	一	同	善好 [※]				
十二号頭注参照。		一	同	龍曉 [※]				
入満之義伺之通り被仰付候二付、伺帳二朱書二而伺通与相認、		一	東成寺	中座	『史報』二			
		一	学林二而	流芳	不詳。			

尚左之通り端書^{奉書}御用掛り左司馬^江相渡。
肥後 竟岸
十一夏続席以後依御用不続二相成有之候处、今般思召を以可接十七夏之末旨被仰付之。

(表紙)
天保九丙戌年七月
学林諸記
四 留役所

七月十六日

一 口上之覚

一来亥年夏阿弥陀經講演仕候様被仰付、難有奉敬承候。兼而六月廿五日御定日迄二一部通講仕候様被仰出奉畏候。就右阿弥陀經ハ御文略二御座候而、最初依報段之間ハ入組候義門も無之、聴衆之者も講本御成替被成下度趣内願之次第伝聞仕候。依之恐入候得共、可相成御事二御座候ハ、觀無量壽經被仰付被下候ハ、義門も重々二相成聴衆二も格別出精可仕様二も被察候。於拙僧も從來勘置候義も有之候得者、甚以奉恐入候得共、觀經二御取替被成下候ハ、難有仕合奉存候。此段御役前迄内々奉伺候。以上。

戊七月十四日

御用掛

御役人中様

七月十六日

一 願書

在寮中座[※]
越中 流芳[※]
肥前 寿元[※]

寿元 不詳。
顯性 不詳。
恵明 不詳。
亮恵 不詳。
謙忍 のち阿波
国圓徳寺住。
恵眼 不詳。
巧阿 『史報』二
十一号頭注参照。
祖農 不詳。
興隆 『史報』十
一号頭注参照。
奏天 不詳。
流昇 不詳。
耆年 『史報』十
三号頭注参照。
大襲 不詳。
崇信 不詳。
入蔵 不詳。
義教 不詳。
昇道 不詳。
結夏 『史報』一
号頭注参照。
兼学 『史報』十
三号解説参照。
他家之書↓補注
①

越前 顯性 焰善寺 『史報』十四号頭注参照。
京都 恵明
和州 亮恵
豊後 謙忍
京都 恵眼
河州 巧阿
豊前 祖農
越中 興隆
越中 奏天
越中 流昇
在寮耆年
筑前 大襲
豊前 崇信
越中 入蔵
日州 義教
和州 昇道
私共義
為修学安居結夏仕、当夏者最早本副御両講拝聴仕候段難有奉
存候。然処兼学之儀者一向聴講も難致、他家之法相等曾而及
申悪育之至甚歎ケ敷次第第二御座候。右二付同志之者共為兼学、
或借小房致発起、或走他上費身財候者も御座候。然二貧学之
私共不能其儀候段御賢察被成下、何卒以御慈愛於大講堂年々
他家之書屯部通講御座候様、偏ニ奉願上候。右願之通御許容
被成下候ハ、難有仕合可奉存候。以上。
戊七月 学林
御役所

七月十七日
一学林耆年・中座方差出候夏中於講堂他部之書講釈有之度願書、

御用僧焰善寺へ相渡し勘考申付。

同日

一来夏学林代講書之義、僧朗願之通更ニ改而觀無量寿經と被
仰出、其段左之通以端書奉書御用掛左司馬江相達。

七月十四日

一過日差出し候所化選舉殿試筆記、御用僧興元寺江相渡。
一学林所化殿試之論題申達候者御用僧方致し候義ニ而、猶其上
弥右之通ニ而宜敷与申節、選舉被仰渡之前一応御用僧方右筆
記を以龜鑑与致し候義ニ而者無之、弥此上学問出精可致旨申
達候義ニ候所、右両様共此度者其次第不相立候旨申出候二付、
其段御用懸り江申達。

七月十七日

一学林耆年・中座方差出候夏中本講副講之内多部之書講釈之義、
右趣意者随分尤之様ニ有之候得共、何分右連印願人蔭満・上
座之者無之、且看護より願と申義無之、先超越之次第二も相
成候旨如何之旨御用僧方申出候二付、尤之趣意故、先願意之
義ハ差置、例年於講堂為読聞候御修目ニも三人以上之願者御
取上無之、尤蔭満上ニ而可否示談之上願出候様之義ニ致違
背之次第、此度之願ハ強而差支ハ無之候得共、後々強訴ケ間
敷義多人数願出候節之差支ニ相成候間、其趣意ヲ以可申達旨
ニ而願書御用掛り左司馬江差下ス。

七月廿日

一先日学林所化耆年・中座方相願候本副両講之内他部講釈之義、
一統之願ニ而無之候ハ而ハ如何之旨申聞、御用掛りより相下
ケ候処、段々示談有之、元来願意之他部之義右両講者思召ニ

而講書被仰出候事故、若本人不得手之書被仰出候時^者差支、尚亦聴衆も他部之義故、望二無之書二候得^者聴講之者無之様相成候^而ハ不都合之由二^而、示談決着之上、右願^者相止候旨左司馬申出。

七月廿日

一願書

因州気多郡鹿野村

光輪寺住 無蓋義

文化十五戊寅夏懸席仕、其後八夏迄続席仕候処、心得違^方他之邪説二取惑^ひ罷有候趣達御聴御糺之上、御咎蒙奉懸御苦勞段恐入悔千非候事二御座候、然所其後御慈悲之御沙汰を以、深重之御教諭被成下、且林中^江御預二相成厚預御教示追々御正意二本附、既二三ヶ年前再入懸席御免二相成、其後修學出精仕罷有候。尤当夏為三夏続席上京仕候二付、拙僧共法門研究仕候処、御安心^者勿論御相承之御宗意粗相弁候。尚又国学等も聊心得居申候得^者、初心引立二も可相成人体二存候間、何卒格別之思召を以、右無蓋義復席御免被仰付被下候ハ、本人^者勿論我々於^而も如何計敷難有仕合存候間、何卒右願之趣宜御取成被下度偏二奉願上候。以上。

円悟 肥後国広

福寺。

天保九戊戌年

七月

下座新隸惣代

肥後 円悟^{*}

中座惣代

越中 流昇

耆年惣代

同 入蔵

上座惣代

日向 黙了^{*}

藤満惣代

河内 龍暁

学林

黙了 『史報』十

六号頭注参照。

御役所

七月廿四日

一茶地金欄輪ケサ

^{*}勸学被仰付候二付被下之。御用掛り洪蔵^江相渡。

越中 巧便^{*}

同日

一藍染松茶輪袈裟

司教被仰付候二付例之通り被下之。右同断相渡之。

越後 恵麟

同日

一

石州稲用村

浄土寺

唯浄

司教職被仰付有之。

去ル六月廿日往生之旨林門^方書附を以届出候旨二^而、御用懸り下役洪蔵^方差出。

同日

一因州光輪寺新無蓋懸席之次第、御用懸り^方学林為調候所別紙之通り看護^方書付差出ス。

乍恐口上書

因州無蓋義懸続席等之義御尋二付申上候。

因州気多郡鹿野光輪寺新

無蓋

初入

文化十九戊寅夏懸席六十巻番二^而

文政八乙酉迄無滞続席仕候。

右相改申候所相違無御座候。尤同人廃席之義二付^而者、学林

万亀鑑 学林に
伝えられた、知
事・看護の執務
マニュアル。学林
の年中行事の差
配が主な内容。

頼母 『史報』十
九号頭注参照。

黒野 黒野御坊
のこと。
光順寺 不詳。

慶恩 『史報』一
号頭注参照。
大愍 『史報』十
二号頭注参照。

長左衛門 『史

江者一向御沙汰無之趣ニ相見申、依之万亀鑑ニ無蓋一条聊も
記し無候。已上。

戊七月廿四日 学林

看護所

御用懸

御役人衆中

七月廿五日

一金貳百足

越後 正念寺

恵麟

右学階転進二付、為冥加献上之。
頼母謁。

同日

一 美濃岐阜御坊江為講釈巧便御差向之達書ニ通り、黒野共并輪
番江之達書且勘定肝煎等方申登候輪番且黒野光順寺江之書状
并勘定肝煎江之書状、御用掛り洪蔵江相渡、巧便持参致し候
様申達。

一 右御差向有之候巧便義、久々在京ニ付早々帰国致し度旨御用
懸り洪蔵方申出候ニ付、外御用向之義ニ而者無之候間不及復
命義故、勝手次第可致帰国旨申達。

一

越後姫河原

正念寺

恵麟

勢州講釈相済、直様致帰国度旨御用掛江申出候ニ付、学林造
営掛之義差支無之哉相尋候処、右者慶恩・大愍等引請居候旨、
御用懸長左衛門方申出承り置候事。

七月廿七日

一 紀州鷲森御坊講釈之義普天江被仰付有之候所、所化橋下一件

報」十四号頭注参
照。

普天 『史報』十

一号頭注参照。

所化橋下一件

『史報』十九・二

十号解説参照。

正定寺 『史報』

二十一号頭注参

照。

二付、当夏之知事名前尋有之候ニ付、何時呼来候哉難計候間、
然而急ニ御差下し難相成旨申遣し候所、代り人体御差下之義
申来候ニ付、年預勸学僧朗御差向之義申達御請申上候旨、御
用掛り長左衛門申出候間、其上申上候而左之通り輪番正定寺
江申遣。

右正定寺之書状者紀州帳面ニ記有之。

七月廿九日

一 普天紀州鷲森御坊講釈止二付、達書返上之趣ニ而御用掛り長
左衛門方差出ス。

八月三日

一 御用掛り伺

助教摂州源光寺

普天

同人司教選之義當時在寮勸学・司教中方別紙之通申出候ニ奉
伺。

封中を以奉言上候。

一 石州唯浄義死去仕候由届来申候。依之司教屯人欠減仕候ニ付、
定而助教之内方屯人御選舉可被為在、就右當時助教之内ニ而
ハ、摂州源光寺普天義法藤籍数も長し、且学業習熟仕別而於
御宗意年来切磋之功ヲ積行状底意共、鄙劣之振舞無之者ニ御
座候。仮令御選舉被仰付候而も可然仁体与奉存候。此段乍恐
封書を以奉言上候。以上。

戊七月

年預勸学

僧朗判

勸学

功便同

司教

慶恩同

御本山
御役人中様

同
惠麟同
願樂寺 不詳。
真宗寺 不詳。
西念寺 不詳。

八月五日

一 乍恐口上書

因州無蓋儀懸続席等之義御尋申上候。

因州氣多郡鹿野光輪寺新

無蓋

初入

文化十五戊寅夏掛席六十一番二而

文政八乙酉迄無滞続席仕候。

右相改申候処、相違無御座候。尤同人落席之義二付、学林へハ一向御沙汰無之趣二相見申候。依之万亀鑑二無違一条聊も記し無之候。以上。

戊七月廿四日

学林

看護所

御用掛

御役人衆中

廓忍 『史報』十

二号頭注参照。

西福寺 不詳。

西教寺 了教力。

『史報』十一号頭

注参照。

光林寺 玄肅力。

『史報』十八号頭

注参照。

右留役所因伯国分帳。

一文政八戌年三月無蓋於国方蟄居老僧江御預被仰付之。

右御用僧役所一件二有之。

右復籍願之義、右者不埒二付無抛落籍二相成候事故、外御用向等二而之訳与者相違之次第第二付、右願者不相成旨二而願書差下候様御用懸り洪蔵江申達、願書差下同人從來之次第取調候所、右之通り也。

八月十九日

一輪ケサ 壺

源光寺

普天

司教被仰付候二付被下之。御用掛り洪蔵江相渡ス。

【補注】

①他家之書

本来学林においては、宗乗（真宗の教義）の研究以外に余乗（仏教諸学）の研究が盛んであり、宗派を超えて他宗派の学問も比較的自由に学ばれていた。しかし、安心問題が大きな争点となった三業惑乱以後は、宗乗研究が重視され、余乗の研究は「宗乗の莊嚴」のためという目的がより固定化され、本山から学林に対しても余乗研究を推奨しないようにとの触れが度々出されるようになった。

【解説】

本号掲載の『学林諸記』は次の通りである。

天保九年七月十二日条は、司教・助教・得業仰付の記事である。

次は、『学林諸記』四へと移る。

七月十六日には、七月十四日の越後僧朗より翌年夏講演の阿弥陀経を觀無量寿經に変更したい旨が内々に相談されている。同日には、在寮の中座・耆年の所化より安居において、宗乗以外の余乗も講演するように願い上げがされている。

十七日には、前日の所化の願書が御用僧へ渡されるとともに、僧朗からの講書変更の願い出が許されている。

十四日には、殿試の論題が申達されている。

十八日には、十六日の願い上げが、藤満・上座の署名無しに行われたことに對して、注意がなされている。

二十日には、先日の願書に對して、却下の旨の返答がなされている。

また、同日には文化十五年に懸席し、その後邪説を主張したとしてお咎めをうけたが、許しをえて前年に再び懸席した因幡の無蓋の復席の願書が出されている。

二十四日には、越中巧便が勸学、越後恵麟が司教を仰せつけられ、それぞれ相應の輪袈裟を下賜されている。また、六月二十日に司教を仰せつけられた石見唯淨が死去した旨の報告がされている。また、同日には二十日に復席を願い出た無

蓋に関して、御用懸から学林へ伺いが出され、文化十九年に六十一番で懸席し、文政八年まで続席していたことが報告されている。しかし、願書に記されていた廃席に関しては、学林が関与しておらず、記録も残っていない旨が報告されている。

二十五日には、越後恵麟が金二百疋を昇階冥加として献上している。同日には、美濃岐阜御坊へ巧便を差し遣わすところ、巧便が帰国を希望しているため、帰国が許されている。また、恵麟も帰国を希望している、学林の造営に関しても慶恩・大愍が残っていることから帰国が許されている。

二十七日には、紀州鷲森御坊へ普天が派遣される件について、橋の下で狼藉を働いた所化達の対応のため、見合わせる旨が輪番へ伝えられている。

八月三日には、前月に唯淨が死去し、司教が一人欠員になったため、在寮の助教の中から普天が選出された旨が報告されている。

五日には、二十四日の無蓋に関する情報の追加分が報告されている。天保六年に廓忍へ入門をする以前、文政七年に町役所へ召し捕られ、文政八年に老僧の監視の下自坊に蟄居、文政十一年御召状があったが、老僧が脚気になっていたため断り、昨年御用僧下向の折の御教諭を受け、老僧から嘆願があったのである。しかし、教学的問題での落籍であったため、無蓋の願書は却下されている。

また八月十九日には、摂津普天が司教を仰せ付けられ、相應の輪袈裟が下賜されている。

以上が今号掲載分の内容である。

※本文の翻刻・解説は小松正弥（本学大学院博士後期課程）、頭注・補注については荒木洋太郎・北村太智（本学大学院博士後期課程）が担当した。

表紙解説

大正12年(1923)9月1日に発生した関東大震災から、まもなく100年が経とうとしている。本号表紙の写真は、当室所蔵『大正十二年度雑〈受信・立案〉綴』所収の九条武子・大谷光明の礼状である。武子・光明両名は共に第21代明如宗主の子であり、当時は東京に居住していたため共に罹災者となった。それに伴う本学の「見舞」(詳細は不明)に対しての礼状である。同綴にはさらに、築地別院(築地本願寺)や東京帝国大学(現:東京大学)をはじめとした関東圏の大学長らの本学宛礼状も残されており、京都にある本学も、関東大震災とは無関係ではなかったことが窺える。

本学の震災への対応をみていくと、発生から2日後の9月3日には罹災者の慰問について協議が行われるなど、早くも積極的な動きがみられる。9日からは、京都駅に下車する罹災者救護のため学生が交代で派遣され、その間午前6時から午後11時に至るまで活動した。11日には学部生による罹災者救護活動のため、20日までの臨時休学が決定されると共に、罹災者に対する義捐金募集の通知が発せられている。さらに、その後も神戸・東京への学生派遣や、京都駅への追加派遣が行われるなど、罹災者支援への積極的な姿勢が認められる。罹災した大学の学生の受け入れも実施され、東洋・日本・明治・中央・専修などの各大学から、本学への転学を希望した学生も確認できる。

そして本願寺との連携も、本学の震災対応を語る上では欠かせない。前述した学生による救護活動は、本願寺の救護事業の一環として実施されており、それに伴う慰労金の支給や、さらに罹災学生に対する学資補助についても、本願寺からの資金援助がなされていた。また、10月19日には本願寺において震災罹災者追弔会が執り行われており、本学の学生・職員の参加が確認できる。本号表紙の礼状は、以上のような本学と本願寺との密接な関係を象徴するものといえよう。

一方、昨年から続くロシアのウクライナ侵攻に伴って、本学では2022年5月から段階的にウクライナ人学生の受け入れが行われた。震災と戦争という違いはあるが、100年経った現在においても、被災者に寄り添う本学の一貫した姿勢が窺える。
(荒木洋太郎)

資料室だより

資料保存作業として、以下の作業を継続しておこなっています。

- ・事務文書綴の修復、所蔵資料の調査・目録化、『立案裁決綴』の画像データ化、資料製本。
- ・関東大震災関連の九条武子・大谷光明礼状の写真を今回の23号表紙に掲載、解説を付しました。
- ・大学史資料室 URL は、以下のとおりです。QRコードも公開します。

https://library.ryukoku.ac.jp/Guide/page_id26

※15号より、『龍谷大学史報』はWeb版での発行となっています。



販売情報

『龍谷大学三百五十年史 通史編(上巻・下巻)／史料編(第一巻～第五巻)』

- 体裁:A5判／布クロス上製本／箱入
- 定価:各1冊5,000円(消費税別)
- ご注文は大学史資料室まで、
FAX または書面にてお願いいたします。
- 送料:有料(送料の実費をご負担いただきます)



編集・発行 2023年3月22日発行

龍谷大学大宮図書館
(大学史資料室)

URL

https://library.ryukoku.ac.jp/Guide/page_id26

〒600-8268

京都市下京区七条通大宮東入大工町125-1

TEL: 075-343-3311 (内線5114)

FAX: 075-343-3362